

●司会（山本一巳）— それでは総合セッションを始めさせていただきます。総合セッションは二部構成になっています。まず第一部では、私ども国際中国学研究センターが5年間にわたって取り組んできました研究テーマについての基調報告を各主査からおこないます。

そのあと休憩をはさみ第二部では、各研究会の主査に加えて、各分野から1人ずつディスカッションを加えてディスカッションをおこないます。

それでは、第一部の研究会の報告に移りたいと思います。最初に「中国学と現代中国学構築」研究会主査の加々美先生からご報告をお願いします。

### ◆基調報告①◆

#### 「中国学と現代中国学構築」研究会報告 現代中国学の課題と展望

加々美光行  
＜愛知大学＞

こんにちは。総合セッションの一番バッターを務めさせていただきます。先ほどありました「中国学と現代中国学構築研究会」というのは、このCOE全体の метод論を扱うセッションとして、これまで研究会を重ねてきました。おおむねほとんど同一のメンバーで続けてきましたので、本日、参加されている同じ研究会のメンバーもすべて非常に親しい老朋友になっています。

このCOEのなかで最も困難な課題を掲げてやった研究会ということが言えますし、また別の意味で言えば、大変刺激的な内容に満ちた研究会であったと思います。2003年に最初の国際シンポジウムを開催したときに、今、おいでになっている金観涛先生と溝口雄三先生のお二方からある重大な問題提起がなされました。

私のレポートはパワーポイントを使いません。お手元のパンフレットをご覧ください。その25ページ以降が私の書いたものです（本報告書180頁に掲載）。会場はやや暗いですが、それを見ながらでもいいですからお聞きください。

最初にお二方が出した問題は、歴史的な観点と現代中国学との関係です。歴史的な観点とは、レジュメのなかを書いてあるように「縦糸」、つまり歴史の時間の系列です。このように現在から過去へと、縦の糸で問題意識が広がっていくわけです。それに対して、例えば、米中関係、日中関係、あるいは東洋と西洋の関係は、地球の東と西、あるいは太平洋やユーラシア大陸をはさんで西と東というように分かれた、地域的に分かれたものの相互関係を問題にします。これを「横糸」と言うことができます。この「横糸」と「縦糸」の関係と、その両者をしっかりと絡ませながら問題を論じてくるということが、今まで大変少なかったのです。つまり縦糸は縦糸だけ、横糸は横糸だけ。横糸をもう少し正確に言いますと、同じ時代に違う国、異なる国同士、異なる地域同士にどのような関係が生まれてくるのかという問題です。

先ほど今回のシンポジウムの開催趣旨の際に申しましたように、この地域研究あるいは地域研究のなかのチャンピオンである中国学研究というもののなかにも、長い間、「オリエンタリズム」

というものが深く影響してきました。もう一度確認してみますと、オリエンタリズムを「西洋中心主義」とも訳すことができます。

これはアヘン戦争を代表とする 19 世紀前半期の東洋と西洋の遭遇ということによって、最初の歴史の出発があるわけです。これについては先ほども申しましたが、既に方法論的に、1970 年代末から 1980 年代にかけて、サイード (E. W. Said) やコーエン (P. A. Cohen) といった西洋の側からの学者によって深刻な問題として提起されるようになりました。

それは歴史的にさかのぼれば 19 世紀前半より、もっと昔にさかのぼることもできるかもしれませんが。いずれにしても近代以降に東洋と西洋が遭遇しました。しかし、言い換えれば人類史の近代は東洋と西洋が遭遇することによって、初めて近代というものが成立したと言ってもいいほどです。当時の時代に戻って言えば、それは同時代の東洋と西洋の遭遇であったわけです。その意味では、それを西洋の衝撃 (western impact) と言いますが、実はウエスタン・インパクト (western impact) は横の関係です。横糸の関係として生まれたものであると言うことができます。

その結果、オリエンタリズム批判者、つまりコーエンやサイードが言うように、その遭遇によって受動的に、つまり東洋は受け身的に近代というものを意識します。またあるいは近代という意識を持ちます。西洋は逆に受け身ではなくて、攻撃的な姿勢をもって近代という意識を持ちます。そのような違いが生まれました。

以来、西洋は産業革命からこんにちに至るまで、科学あるいは科学技術と言われるものが驚異的な発展をしてきました。驚異的な発展をみるなかで、西洋はむくむくと自己成長を遂げました。その自己成長というのは、別の言い方をすると西洋の可能性、西洋が本来秘めていた可能性というものを実現していく。言い方を変えれば自己を実現する過程であったわけです。この自己を実現する過程のなかで、東洋は常に受け身を強いられてきました。なおかつ、もう少し明確に言えば、敗北を強いられてきました。西洋がすべての局面において勝利を収めたわけではありません。文明以外の分野では勝ち負けがつかない、いろいろなバリエーションがありますが、少なくとも文明的に見れば明確に西洋は勝利を収めてきました。その結果、東洋に関する、とりわけて中国に関する歴史観のなかには、実は中国の近代はすべて西洋との出会い、西洋との遭遇、ウエスタン・インパクトによって受け身的に始まったという認識が非常に根深くこんにちまで影響してきました。

しかし、果たしてそうでしょうか。中国には中国独自の歴史的発展、歴史的展開というものがあったと言えるでしょうか。つまり、縦糸的な歴史的な発展が、中国のなかに、あるいは東洋のなかに見られなかったと言えるでしょうか。そのような問題提起がなされました。そこが溝口先生と金観濤先生が提起された 1 つの問題です。

例えば日本の歴史について言いますと、江戸時代から明治時代、大正時代を含めて、どちらかという縦糸のほうが非常に強調されるわけです。日本は独自に日本固有の歴史的な発展を遂げてきました。それにはまだ近代以前、プレモダンといえる江戸時代から、既にその萌芽は明確にあったのだという議論です。ですから、黒船によって初めて日本の近代は受動的に始まったのではなく、江戸期から既に日本固有の自発的な発展を遂げる歴史的萌芽があったという議論が、日本の歴史学ではかなり普遍的にみられます。

それに対して中国では、そのような視点が見られません。まったくとは言いませんが、極めて微弱にしか見られません。圧倒的に外発的な、つまり外からの影響によって中国の近代の歴史は

開かれ、そして受動的に中国の歴史は発展をみてきたと考えられてきました。

私の観点は、このどちらかを強調することは歴史的事実にむしろかないません。歴史的事実に反するという事です。つまりウエスタン・インパクトだけを強調することも、むしろサイードやコーエン、溝口先生、金観涛先生が言われているように一面的な見方です。しかし逆に、自発的な、内発的な発展のみを強調することもまたできません。

今日はまだ溝口先生はおいでになっておりませんが、溝口先生は、方法論分科会で報告する予定の内容の1つに、むしろ辛亥革命そのものが極めて省レベル単位の内発的な歴史的な力によって達成されたもので、外発的なウエスタン・インパクト等の外力によって辛亥革命が達成されたわけではないという点を非常に強調されています。

私の問題としているところは、そのような内発性と外発性、このどちらもが相互に絡み合っていて、どちらか一方を一面的に強調することはできません。例えば、辛亥革命以降に、あるいは辛亥革命そのものもそうでしょうけれども、果たしてその目指された発展の方向性のなかに西欧的近代モデルが、その影を落としていなかったのでしょうか、と云えば、そうは言えません。

先ほど言いましたが、西洋は自己実現の膨張を遂げ、膨張のなかですさまじいIT革命を含めて科学技術の進展を、このなかで時間が猛烈な加速化を起し、空間は巨大な空間へと広がっていきます。空間が非常に驚異的な拡大をします。この空間の拡大と時間の加速によって世界を覆いつくしていく近代、西欧から投げられた近代は、一見、内発的に見えるいろいろな発展のなかにも重大な影を落としていると見ざるを得ません。

竹内好という魯迅研究者が、戦後の日本の思想界に大変大きな影響を与えました。彼は1997年に亡くなりましたが、生前、常に強調していたことがあります。それは簡単に言うと「西洋近代は常に自己膨張を遂げ、それに対して東洋は敗北し続けてきた」と。これは戦争に勝ったか負けたかの問題ではありません。戦争だけについて言えば、ベトナム戦争でベトナムが勝ちましたし、抗日戦争で中国は日本に勝利しました。しかし、この戦争自体の中身については方法論セッションのところでお話ししますが、文明的な意味では一見、常に敗北を続けているように見える東洋が、武力的な、軍事的な意味では、ある局面においては、勝利することがあります。現にイラク戦争について、アメリカの国際政治学のなかでは、アシンメトリック・コンフリクト (asymmetric conflict) という概念を非常に強調しています。つまり非対称紛争、つまり文明的に明らかに違うもの同士が戦っていると。例えば、日本とアメリカが戦うというときに、日本は西洋近代の道を歩んできましたので、文明的には、例えばアメリカと極めて同一性を持っています。このような国同士の戦いを同じものの戦争という意味で「シンメトリカル (symmetrical) な戦争」と言います。ところが、文明的にそうではなく明らかに西洋近代と異質なものを抱えている国と西洋の文明に属する国との戦い、これを「非対称の戦争」と言います。

このように文明的な非対称を抱える国同士の戦いにおいては、不思議なことに西洋文明的ではない文明国家のほうが持久戦に耐えることができます。つまり時間が長くかかる戦争です。短期間に終わる戦争ではなく長くかかる戦争において勝利を収めていきます。このようなことが確かにあるわけです。しかし、文明全体としては、例えば、自由市場経済ひとつをとってもそうですが、これを受け入れていかざるを得ないような側面が長くありました。

そのようなことを考えますと、内発的、自発的、つまり縦糸で歴史的発展、東洋の近代というものを評価してみても、それは必ずしもウエスタン・インパクトによって文明が西洋に傾いたわけではなくても、その文明の中身に西洋が浸食してくるという側面があるということです。ここ

が方法論的にしっかりととらえられていなければいけません。

つまり言い換えれば、外からの横糸からくるウエスタン・インパクト的な横からの圧力と、内側から発展を遂げていくもの、この2つの相互の連動性というものを視野に置いていくべきであるということです。このことによってのみ、オリエンタリズム、つまり西洋中心主義と言われていた方法論的な「歪み」というものを克服できます。

少し第一の問題で時間を長くとりましたので2番目の問題に移ります。場合によっては3番目の問題まで話はできないかもしれません。

この私どものCOEのプログラムのなかで、環境研究会は非常に重要な意味を持っています。実際に環境研究会によって日中間の対話という、私どもが非常に重視している方法的な側面、方法的な困難が突破できる可能性があるわけです。なぜそうなのかという問題です。これは私どもが歴史を扱う際に、もちろんグラスルーツの問題を扱わないわけではないのですが、どうしても等身大の世界というものを忘れがちです。なぜ等身大世界が重要になるかというのは歴史観にも深くかかわってくる問題です。等身大世界は、例えば人類が300万年前に誕生して以来、おなかに赤ちゃんを宿して出産するまでの期間、十月十日というのはほとんど変わっていないわけです。300万年ほとんど変わっていません。そして、人間の歩くスピードも同じように300万年、そうそう変わってはいないわけです。

時間の加速化と空間の驚異的な拡大が、自然科学の、特に科学技術と結びついた科学によってこんにち達成されてきました。ですから、世界を見る場合にグローバルな局面を見落としては、例えば一国の問題、中国や日本の問題も扱えないという時代に突入しているわけですが、グローバルとは言うまでもなく空間がそこまで拡大したということです。

例えば、コロンブス以来、地球が丸いということがわかり、地球という空間がこれだけ大きいことがわかりました。にもかかわらず、その時代に地球の裏側というものが空間的に極めて遠い世界であるという空間意識があったことは誰も否定しないと思います。

こんにちのグローバリズムというものの意識の重大性は、例えば、パソコンのボタンを押すだけで、瞬時に日本の裏側のアルゼンチンの友達と情報の交換ができます。もちろん電話もできます。飛行機はまだ若干遅いですね。昔と比べればもう飛躍的な発展を遂げていますが、日本からアルゼンチンまで行くのには十数時間、場合によっては丸一日かかります。

しかし、それでもその空間の拡大というのは意識においては空間が縮小するということですが、これは恐るべきものです。同時に時間も猛烈な加速化を生じています。

今、言いましたように、かつて鑑真和尚は、日本の奈良時代に、中国の寧波から奈良（大和）まで来るのに何回も難破し、遂には失明するという困難を乗り越えてきました。しかし、私が寧波の近くの上海まで飛行機で行くのに、名古屋から行く場合2時間半で行きます。わずか2時間半です。これは猛烈な時間の加速化です。つまり意識上の空間の縮小ということは時間の加速化を伴っているわけです。

ところが、環境は命というものを伴っています。人間の命も言わば環境の一部ですが、これは先ほど言いましたように、妊娠期間が十月十日かかります。例えば、ここから名古屋駅まで歩けば相当の時間がかかります。しかし、電車で行けば5分です。もし等身大の世界でみんなが行動するとすれば名古屋駅まで歩いてみてください。どれほど名古屋駅が遠いかがわかるはずですが、ところが、電車に乗れば瞬時に着きます。こんなに近いかと思うほど近いわけです。このように命ある等身大世界というのは、実は300万年変わっていません。

ところが、モダンの関係、近代との関係では、ポストモダンとモダンとプレモダン。プレモダンは簡単に言うと近代以前ということですが、ポストモダンはもう既に言い古されてしまって、それを越える超ポストモダンとも言えるほどの世界が現れてきています。ところが、この3つのうち実は近代以前（プレモダン）の世界は、まだ等身大の世界に現に脈々として存在しているわけです。

私たちの世界にも実はプレモダンがないわけではありません。人体は科学技術によって加速化したり空間を拡大したりすることが簡単にはできないからです。しかし今や、人体そのものに科学技術が触れる段階についにきています。ご存じのように、タンパク質の合成やDNAといったようなものを人為的につくる時代に入ってきています。それは人体をサイボーグによってつくるという欲望を人間に生み出しています。にもかかわらず、やっぱり十月十日も赤ちゃんをおなかに抱えて、ここにおられる女性はみんなそれなりに過酷な妊娠期を過ごさなければなりません。それは不便です。それをもっと便利化したいという要求があるはずなのに、むしろ便利化することを警戒します。そうしてはならないという人間の声が、人々の声があるわけです。

このように、実はプレモダンは、私たちが考えている生産様式や一般の生活様式だけではなくて、人体にまつわるもの、命にまつわるものとして、例えば環境や人間というもののなかにかちりと、まだこんにち存在しているわけです。

ところが、中国社会はそのプレモダンの部分がまだ大きいのです。それからアジアやアフリカもまだ大きいのです。全体としてモダンに突入した部分、これが私たち日本やヨーロッパと比べるとその比率が少ないからです。ところが問題は、比率が少ないにもかかわらずポストモダンの要素が、既に公然と、そのような世界に入ってきてしまっているわけです。

篠原三代平という今年の文化の日に文化勲章を受けた経済学者がいます。彼は1960年代に日本の経済の二重構造論を主張しました。二重構造論はモダンとプレモダンの構造です。ところが、こんにちの中国やアジアやアフリカが抱えている困難は三重構造なのです。三重構造というのは、ポストモダン、モダン、そしてプレモダンという3つが同時に入ってきてしまっています。猛烈な摩擦を起こしながら、現在、中国社会の変容というものに迫られています。あるいは人々の心の変容というものに迫られています。この問題は日本にも当然存在しています。日本はプレモダンはなくなりました。つまり農業、林業、漁業と言われているような「命」というものを抱えている自然的な環境というものを生産対象とした第一次産業が、いまや産業従事人口が5、6%という時代に突入しているわけです。その意味では、その部分は減っています。しかし、先ほど言いましたように、命にまつわる世界、これがある限りは実はモダン化しない部分というものをどの世界も持っているわけです。日本も持っています。特に環境という問題は、それに直接かわる問題です。

ですから実は同質の問題を日本も中国も抱えています。ポストモダンというものをつくりだしてしまった人類、この意味では運命を共にしているわけです。その視角から中国の現状を踏み込んで切り取っていくという、これが極めて重要な意味を持っていると思います。

時間が迫ってきていますので、次の3番目の問題を十分にお話しすることができません。趣旨説明のところで、3番目の問題については若干お話ししました。

つまり地域研究（エリアスタディ）が抱えていた弊害、私ども日本の問題、私たち欧米人の問題と、中国人の抱えている問題をあたかも異質なものと考え、ウォッチング的に対象化してとらえるという方法、これがエリアスタディの根本的な弊害でした。つまり対象としてあるのはオリ

